

# 公益の風 #12

東北公益文科大学  
教授

澤邊 みさ子



東北公益文科大学に勤める前は、日本障害者雇用促進協会（現・独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構）の研究部門で非常勤の연구원として働いていました。障がい者の就労問題を本格的に研究テーマとしたのはその時からです。その後、大学時代の恩師であり、東北公益文科大学の初代学長であった小松隆二先生に声をかけていただき、公益大に着任しました。酒田、庄内に来て、それまで机の上で考えていた障がい者の雇用・就労の現実に触れる機会が増え、それまでは制度や政策が問題解決には重要と考えていたのが、当たり前前かもしれませんが、地域の実情にあった方策を考えることの大切さを実感しています。

働く場としてまず思い

## 障がい者の姿を見て働く意味を考える

浮かぶのは一般企業や官公庁です。わが国でも、障がい者が雇用されて働けるようになるにはどうすればよいかという視点で政策や制度が進められてきました。しかし、障がい者の「働く」を支援する制度はこれだけではありません。一般企業や官公庁での「現在の」働き方には合わない人たちがいます。その人たちの能力が発揮され、何かしらを生み出す場として、就労継続支援事業というものがあります。制度的には障害福祉サービスの一つであり、支援を受けながら多くの障がい者が働いています。作業内容や生産品は実に多様で、弁当や菓子など製造、リサイクル、企業の下請けによる部品の組立・解体など、また、飲食店での接客・調理、清掃などのサービス業を行っているところもあります。障がい者が受け取る報酬を工賃というのですが、1人当たりの平均月額工賃が、山形県は全国で最も低い（令和二年度データ）ことが一つの課題であり、順位はともかく、工賃が低い理由とその改善策については研究すべきことだと考えています。



障がい者施設で作られた木製のおもちゃ

なか働く機会を得られない障がい者が多い、そこに福祉サービスも加わって、農業に障がい者の働く場を作ろうという取り組みです。最初は農作業の手伝いという関係だったのが、次第に農業に本格的に取り組む社会福祉法人や障がい者の雇用に取り組み農業法人なども増えてきています。農業が盛んな山形県でも「山形県農福連携推進センター」を設置し、取り組みを進めています。もう一つ注目すべき分野が「アート」です。アートの世界で才能を発揮する障がい者は少なくありませんが、その作品に付加価値をつけて商品化しているところが全国のあちらこちらにあります。付加価値をつけているのは周囲の人ですが、アート作品を生み出すことも障がい者の働き方の一つといえるかもしれません。酒田市でも数年前から毎年「いろいろな障がい者のアート作品が紹介される展覧会が開催され、好評を博しています。私も毎回見に行くのですが、とてもワクワクさせられる展覧会です。障がい者は働けない、と考えている人はいまだにいます。しかし、それは「働く」を狭く捉えているように思います。働く目的の一つは収入を得ることですが、自分の能力を発揮でき、社会の一員である実感できるという意義もあります。障がい者の有無にかかわらず、多くの人がそのような機会を得られる社会が実現することを願ひ、私は障がい者の就労を考えていきたいと思ひます。